

平成21年4月8日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17560570

研究課題名（和文） 初期書院造の空間構成に関する研究

研究課題名（英文） Research on the space composition of early SHOIN-ZUKURI

研究代表者

光井 渉 (MITSUI WATARU)

東京芸術大学・美術学部・准教授

研究者番号：40291819

研究成果の概要：日本を代表する住宅建築様式である「書院造」の初期（16～17世紀）遺構の空間構成を、小壁や欄間の意匠と配置形式から分析し、併せて書院造の成立状況の仮説を提供した研究。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,200,000	0	1,200,000
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	390,000	3,490,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：日本建築史・書院造・空間・欄間・障壁画・照度

1. 研究開始当初の背景
「書院造」は、16世紀に出現した住宅様式で、その建築的特徴や使用の論理あるいは社

会的意義については、これまでも多くの研究蓄積がある。とりわけ、戦前から戦後にかけての藤原義一・藤岡通夫の研究は、書院造遺

構を細部様式から分析し、その時代的な変化過程を明らかにしたもので、その後の研究の基礎を築き、昭和20年代以降の文化財保存のアウトラインを導いた。また、昭和30年代以降の平井聖による研究は、書院造の間取りを、使用状況を基本とした機能に分析したもので、これによって、書院造をベースとした各種住宅建築の社会的意義が明らかとなった。しかしながら、これらの研究は建築的細部及び間取りに注目して行われたものであるために、書院造を構成する各室がどのように結合して全体を構成しているのかといった空間構成への視点に欠け、中でも、書院造の空間を規定する重要な要素である「欄間」や「小壁」といった「内法上装置」の配置方法や障壁画の画題選択、あるいは建築の方角と室内照度といった建築的な基本要素について分析が及んでいなかった。また、昭和30年代以降に進展した文化財建造物の修理事業によって得られた知見もほとんど反映しておらず、改造による形態の変化が散見される書院造の初期遺構についての実証的分析も行われていなかった。

2. 研究の目的

前記1. に記したような背景を念頭において、本研究は、書院造という建築様式が、いかなる空間構成をもつものであるかを、遺構の調査を基に明らかにすることを目的として実施した。具体的には、書院造を構成する各室を単位要素として、それらがどのような空間的特徴を持ち、どのように結合しているかを、平面的な情報だけではなく、断面図や天井伏図に現れる様々な要素、特に欄間や小壁といった内法上装置や天井の意匠、あるいは障壁画の画題、照度の分布を用いて実証的に明らかにしていくことにある。

3. 研究の方法

前記2. に記した目的を実現するために、本研究では下記のような方法を用いた。

(1) 調査対象の限定

書院造は日本を代表する住宅様式であり、その遺構の分布は、時代的には16世紀以降現代まで、用途種別は武家住宅・寺社建築・農家・町家など極めて多岐に渡っている。そこで本研究は、書院造という建築様式が発生し、様々な変容を繰り返した初期の段階である16～17世紀に時代的に絞り（これを本研究では「初期書院造」と仮称した）、また対象も、これまで遺構の詳細調査が行われている重要文化財指定物件に調査対象を限定し

て行った。これに該当する遺構数は88棟であり、そのうち調査の許可を得た45棟について調査を実施した。

(2) 既報資料の整理

重要文化財の初期書院造については、文化財指定時に建築的な調査が行われ、また大規模な修理を経たものについては修理工事報告書が作成されている。これらの既報資料を収集し、それらをもとに、実地調査以前に可能な限り建設当初の形態を復元的に考察した。

(3) 実地調査

前記した目的を達成するために、本研究では実地調査に際して、

- ①各室の境界線
- ②各室の天井意匠
- ③座敷飾りの配置
- ④床高さ
- ⑤障壁画の画題
- ⑥建築の方位

の全項目を記録するために、全室全境界及び天井面を写真撮影した。また、各室の性格を把握するために、⑦照度分布の計測を行った。なお、短時間で立体的な照度状況を計測するために照度測定機器を作成した。

(4) 実地調査結果の作図

前記(3)の調査内容をまとめた下記のような図面を作成した。

(1) 内法上装置の配置図

これは、平面図には現れない内法上装置の状況を現した図で、具体的には、内法の上下の建築的装置を、①上：小壁・下：壁、②上：小壁・下：襖、③上：欄間・下：襖、④上：落し掛け・下：開放、の4種に分類し、その配置状況を、調査対象毎に1枚の図面で表現した。

(2) 展開写真

これは、より精密な建築的状況と障壁画の画題を確認するために、調査時に撮影した各室境界の写真を展開して表現したものである。

(3) 照度分布図

これは、各室の照度分布を視覚的に表現するために、測定した照度の数値データを基に、濃淡表現に置き換えて図化したものである。作図は、高さ80cmと150cmの平面的な情報と、断面で表現した場合について行った。

4. 研究成果

前記3. の方法を用いて、調査対象の書院造遺構を検討した結果、以上の検討の結果、初期書院造の遺構は、以下のような3つのプロトタイプの組み合わせによって空間を構成していることが判明した。

①座敷飾りを持つ独立性の高い室
②座敷飾りを持つ室を筆頭にして、連続する複数の室が直線的に並ぶ形式
③左右対称性の高い3室が空間的に連続し、その奥中央に仏間を設けて凸型とする形式
このうち、Aは慈照寺東求堂の同仁齋にみられるようなもので、室の規模は小さく、また座敷飾りの意匠も簡素で、帳台構えを伴わないものである。こうした独立性の高い室は、本格的な書院造の展開よりも以前、中世に既に萌芽し、BやCの枠組みを持つ後世の書院造に対しても、一部を構成するパーツとして機能することで継承されたものとみなせるものである。また、書院造的要素の他類型への展開、即ち庫裏・町家・農家への組み込みにおいても、単独室という利点から有効に機能したものである。このタイプの室は、武家社会の儀礼に直接対応するものではなく、私室としての性格が強いもので、BやCの類型に組み込まれた場合でも、内法上装置・座敷飾り・天井の意匠、あるいは障壁画の色彩や画題などで、明確に区分されている。
次いでBは、前述した1列型という形式で戦国期に萌芽したもので、初期においては東西に一直線に並ぶ1列型（東西）の単純な形式であった。しかし、桃山期には、方角を東西から南北へと変えると同時に、Aの単独室の付加や複数の1列型を並置するなどの手法を用いることで2列型へと変化し、17世紀に入る頃までに、2列型の中でL字型に折れ曲がる室の並びを獲得して定型化し、寛永期にはさらに折れ曲がりを増やして、コ字型に連なる形式となることで完成に至り、武家社会の儀礼を直接反映する本格的な書院造の形式である。なお、この1列型の書院造的室の並びもAと同様に、町家や農家など他の建築類型に組み入れ可能なものでもある。
最後にCはいわゆる方丈形が該当し、仏教行事を基盤とした凸型の拡がりを持つ空間を基盤とするが、そこにAやBの要素がどのように組み入れられるかで、前述したように多様な空間構成を獲得したものである。特にBの要素の組み入れにおいては、凸型の拡がりを持つ空間の一部が1列型の一部と重なることになるが、そのどちらが優越するかを天井の意匠や障壁画の画題によって表現する手法も確認できる。
このように、これまで平面形式でしか把握されていなかった書院造の遺構に対して、内法上装置・天井の意匠に着目することで、その空間構成のバリエーションとその構成原理、あるいは発展過程に関する一定の仮説を提供できたものと考えられる。
なお、本研究の成果については、『初期書院造の空間構成に関する研究』としてまとめ、主要な建築史の研究機関・研究者に配布している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

木村顕・光井渉、内法上の建築的装置に着目した<座敷列>に関する研究、『日本建築学会計画系論文集』、査読有、600号、2006年2月、pp179-184

〔学会発表〕(計1件)

光井渉、町家遺構からみた検討、日本建築学会日本建築史小委員会平成20年度公開委員会、2008年12月13日、東京大学工学部1号館

〔図書〕(計1件)

光井渉、私家版、初期書院造の空間構成に関する研究、2009年3月、160頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

光井 渉 (MITSUI WATARU)

東京芸術大学・美術学部・准教授

研究者番号：40291819

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し

